



第5回

わずらわしくて、あたたかい、 高齢者から子どもまでごちゃまぜの暮らし

ゴジカラ村 大須賀 豊博 氏（社会福祉法人 愛知たいようの杜 理事長）

はじめに

人口減少を前提としたまちづくりである「地方創生」に、各自治体に取り組んでいる。あるところは歴史的に受け継がれた地域資源を活かし、あるところは専門家を招へいして斬新なアイデアを打ち出すなど、「正解のない課題」への対応に試行錯誤が続いている。

このような中、地域の活性化を目指す取り組みに果敢に挑戦している民間の方々がいる。本シリーズでは、そういった取り組みにスポットをあて、「正解のない課題」の解決に向けた糸口を紹介していきたい。

第5回は、雑木林の中で高齢者から子どもまで一緒に暮らす「ゴジカラ村」の取り組みを紹介する。

①長久手市とゴジカラ村

(1)日本で最も若いまち

ゴジカラ村がある愛知県長久手市は、名古屋市東部に隣接するベッドタウンである。今も人口が増え続け、住民の平均年齢は38.6歳（平成27年国勢調査）と日本で最も若いまちだ。

その長久手市と名古屋市の境に

ある猪高緑地から続く雑木林は、小高い丘に木々が青々と生い茂り、そのすそ野に並ぶ真新しい家々を見守るかのようによく伸びて広がっている。そんな雑木林の中に、まさに小さな村のようなコミュニティを作っているのがゴジカラ村だ。

(2)木も人もごちゃまぜ

ゴジカラ村内には、5つの高齢者

向け施設、3つの古民家、幼稚園、託児所、専門学校、喫茶店、陶芸工房、合わせて13もの施設が約1万坪の敷地に点在する。その特徴は何と言っても敷地全体を覆うように広がる雑木林である。様々な種類の木々が「ごちゃまぜ」となっており、おもいおもいに枝を伸ばし、地面には落ち葉や枯れ枝、どんぐりなどが落ちていて、雑然としているがほっと包まれ



雑木林の中の幼稚園（閉園後に撮影。延長保育の子どもたちが残っていた）



ゴジカラ村
大須賀 豊博 氏

るような空間がそこにある。そんな雑木林と同じように、高齢者から子どもたちまでいろいろな世代が「ごちゃまぜ」になって暮らしている。

一口に高齢者と言っても、特別養護老人ホームで介護を受けながら暮らす高齢者、ケアハウスで自立して暮らす高齢者、さらに村へ通って来てボランティアにいそしむ高齢者など様々である。高齢者だけではない。幼稚園に通う子、託児所にやって来る子、古民家で地域のお年寄り

と過ごす子、放課後に学童保育へやって来る小学生、村内の専門学校に通って来る学生たちもいる。さらには、子どもを連れて来る親たち、高齢者向け施設や幼稚園などで働いている人、喫茶店や陶芸工房、古民家の集会スペースなどに集まる地域の人たちもいる。高齢者向け施設の入居者や子ども向け施設の利用者、学生、職員、ボランティア、訪問者など合わせて1日900人近い人が出入りしている。

村内に点在する建物は、雑然と建っているように見えて、実はいろいろ工夫されている。建物同士の間は近すぎず、遠すぎない。お互いの声や物音は聞こえるが、木々の間に見え隠れしていて心地よい距離だ。建物の高さも雑木林にちょうど隠れるように調整されていたり、木々をできるだけ切らないようにと、樹木を避けて建てられている。

多くの高齢者向け施設では、玄関

を入ると受付があり、その隣に事務室、さらに奥にまっすぐ続く廊下があって、部屋が並んでいる。「まるで、会社か病院のようだ」(大須賀氏)。高齢者の暮らす場所が会社や病院のようにならないように、ゴジカラ村の施設ではあえて廊下を真っ直ぐにしていない。また、建物の真ん中に設けることが多い共有スペースを、あえて角に設置して、窓から外が見えるようにしている。「子どもや学生、ボランティア、訪問者が行きかう姿が見えることが、施設に暮らす高齢者にとっては良い刺激となる」(同氏)。床や壁にも木そのものがふんだんに使われている。傷やよごれも木の床や壁であれば使い込んだ風合いになる。まさに、建物の内も外も木々に囲まれている。

私が訪問した日には、中庭では食事会が開かれ、バーベキューコンロでさんまを焼くにおいがしていた。また、古民家からは歌声が、幼稚園からは子どもたちの歓声が聞こえた。「ゴジカラ=5時から」という名前に込められた思いのとおり、仕事が終わった後のように、数字や時間、効率に追われるのではなく、いろいろなものが「ごちゃまぜ」で、でもおおらかに包み込まれているような「暮らし」が感じられた。

② 取り組みの原点と継続の秘訣

(1) 自然にあふれた風景の中での暮らし

ゴジカラ村の始まりは、40年近く前になる。創業者である現長久手市長



曲がって先が見通せない廊下



の吉田一平氏は商社マンとして猛烈に働いていたが、体を壊し自宅で療養を余儀なくされた。これをきっかけに自分のまちを見直してみると、ベッドタウン開発により、野山や田畑が広がるふるさとの風景が失われつつあった。これからの子どもたちにもこれまでのようなふるさとの風景の中で育てて欲しいと思い立ち、昭和56年(1981年)、雑木林の中に幼稚園を開いた。

しかし、幼稚園の先生たちからは、自然の中では子どもたちへ目が行き届かないという声が上がった。地域にみえた時間にゆとりがありそうな高齢者に、困った吉田氏が相談を持ちかけると、「一緒に子どもの面倒をみてあげるよ」と手伝いに来てくれた。驚いたことに、助けるつもりでやって来た高齢者たち自身が生き生きとしていた。

その後始めた高齢者向けの施設では、高齢者を元気づけるために、今度は子どもたちに助けてもらうこととした。隣接する幼稚園から園児たちが施設に来たり、古民家に預けられた子どもたちが夏にはお昼寝に来る。さらに、専門学校の学生も実習やボランティアでやって来て、高齢者

と話をする。そうやって子どもや学生が施設を訪れるようになると、子どもを見守る、子どもに注意する、学生に昔のことを教えるなどといった役割ができ、施設内の高齢者たちの暮らしに張り合いがでてきたという。

「今の街中では、ワンルームマンションには単身の若者、ファミリー向けマンションには子育て世帯、さらに有料老人ホームには高齢者が住んでいる。こういう生活はどこかおかしい」。これは人の暮らしにまで効率を持ち込んでしまった結果だと大須賀氏は言う。「親は子育てについて相談することができなくなったり、若者はひきこもってしまったり、高齢者は老々介護に疲れてしまっているのではないか。昔は、みんな一緒にごちゃになって暮らしていたはず。その方がよっぽど自然ではないか」。

(2) 困ったことは抱え込まない

ゴジカラ村を40年近く続けて来られた秘訣について聞いたところ、「困っていることや悩んでいることを抱え込むのではなく、周りの人たちにオープンにしてきたこと」だと大須賀氏は教えてくれた。

ゴジカラ村では、雑木林の中で幼稚園を始めた時に、地域の人たちに助けてもらった経験が原点となって、当初から困ったことを抱え込まずに周りの人に相談するという姿勢を続けてきた。相談してみると、周りの人はアドバイスやヒントをくれたり、さらに一緒になって手伝ってくれたりしたそう。だ。「すべてがうまくいっていたら、誰も助けてはくれない。うちはうまくい

かないことばかり(笑)」(大須賀氏)。でも、うまくいっていないからこそ、「じゃあ、手伝おうか」という声もかけてもらえる。こうした経験を何度もして来た。

さらに、「助けるつもりでやってきた人自身が、生き生きしている」(同氏)ことに気付いた。困りごとが解決して自分たちのためになるだけでなく、助けてくれた人たち自身も「人の役に立った」というやりがいになり、お互いのプラスになる。だから、困ったことは抱え込まずに、すべてオープンにし、いろいろな人に関わってもらうという方針を変えるつもりはない。

③ 地域の人との交流

すべてをオープンにし、いろいろな人に関わってもらってきたゴジカラ村は、今でも多くのボランティアに支えられている。

例えば、きねづかシェアリングというボランティア組織を作って、「昔取った杵柄」を活かしてゴジカラ村で活動している男性たちがいる。平均年齢は70歳代半ば。近隣の人もあるし、遠方から来る人もいる。そもそもの始まりは、愛・地球博でボランティアをしていた仲間が万博終了後にゴジカラ村でボランティアを始めたことだ。ほぼ毎日、3交代で20人ぐらいの仲間と分担して、来訪者への対応やゴミの運搬、車椅子の洗浄などの作業を必要に応じて行っている。

その一人である高田澄氏に話を聞くと「ボランティアは自分のため。動けるうちは体を動かしておいた方が良くと思ってやっている。施設の高齢者に喜んでもらえるのが嬉しい。



きねづかシェアリング ボランティア
高田 澄 氏

人の役に立っているのがやりがいになる」と語ってくれた。

きねづかシェアリング以外にも、ボランティアをしている人たちがたくさんいる。村では年1回ボランティア感謝祭を開いているが、そこに集まるボランティアは毎年だいたい130人ぐらい。高齢者向け施設を開いた32年前から毎月散髪に来る理容師さんや、18年近く毎週金曜日に通って来る合唱グループなど、長年関わっている人もいる。

また、高齢者向け施設の隣に移築した築200年近い古民家で、子どもたちを預かって面倒をみている地域の高齢者もいる。約20人ほどの見守りスタッフは、ただ一人の職員以外、全員ボランティアだ。「ここで活動する高齢者は、子どもたちを叱ることはもちろん、親にも注意するんですよ」と大須賀氏は嬉しそうに語る。「幼稚園の先生はなかなか親に厳しいことは言えないのですが、ボランティアの高齢者は昔と変わらず親に

も厳しく言えるんです」(大須賀氏)。

ゴジカラ村には、ボランティアにとってやるべきことがたくさんある。「『あれではいかん。何とかしないかんぞ』と遠慮なく注意されますよ」と大須賀氏は語る。「『すみません、時間がなくて』と答えると『やってあげよ』と言ってくれる。とてもありがたいですね」と同氏は笑う。こうして、たくさんのボランティアが集まり、いろいろな活動をしている。

もちろん、いろいろな人が入って来ればもめ事などがおこることもある。人に関わってもらうことは「わずらわしい」。けれども、みんながそれぞれやりがいを感じながら生き生きとできて「あたたかい」「わずらわしくて、あたたかい暮らし」こそ、ゴジカラ村が目指すものだ。

④ゴジカラ村のこれから

ゴジカラ村が始まった頃、世の中

は高度経済成長からバブル景気へ突入していく急激な右肩上がりの時代だった。その後、バブル景気が崩壊。「失われた20年」とも言われ、さらに人口減少社会が到来した。右肩上がりの急成長から一転、低成長となった。

一方、ゴジカラ村ではいろんな世代がごちゃまぜで助け合いながら、わずらわしいけれど、あたたかい暮らしを続けて来た。「我々はほとんど変わっていない」と大須賀氏は言う。「我々が行っているのは事業ではなく『暮らし』。だから、大きく変わることもなければ、変える必要もない。事業を広げることはあるかもしれないが、それはあくまで必要な時だけ」と、大須賀氏はにこやかに語ってくれた。

同氏の話のを伺いながら、思い出したことがある。雑木林というのは実は、自然そのままではない。人が手入れをしない雑木林は、優勢な樹種に淘汰され、極相と呼ばれる「森」になり、人が生活に利用できる雑木林ではなくなる。

下草を刈ったり、枝打ちをしたり、植樹したり。その維持には手間ひまがかかる。雑木林にも「わずらわしさ」が大切だ。ゴジカラ村のパンフレットやホームページには「雑木林が暮らしの座標軸」と掲げてある。あえて「わずらわしい」人との関係を持ち、いろんな世代がごちゃまぜのゴジカラ村が体現する「暮らし」こそ、地方創生で目指すべきものではないだろうか。

(2018.10.31)

OKB総研 調査部 市来 圭



古民家で子どもの見守りをするボランティア